

# 通産省ICカード担当官に聞く、ICカードの取り組みと、JICSAPへの期待

JICSAPとはICカードシステム利用促進協議会の略。設立6年目で、その間、ICカード普及のためにさまざまな活動を行ってきた。策定されたばかりのJICSAP仕様もその成果の1つだ。そこで、通産省機械情報産業局でICカードなどを担当しておられる藤原氏に、同省のICカードの取り組みや、またJICSAPへの期待などについて伺った。

## アプリケーションにとらわれない標準仕様作りを担う

中村：まず、ICカードについて通産省がどのような取り組みをされているのか、その全体像からお話下さい。

藤原：ICカードへの取り組みとしましては、大きく3つの柱があります。1つは、工業技術院で取り組んでおりますJISなど標準化を行う作業。2つめは、JICSAPなどが中心となって取り組んでいる業界標準の策定作業や各種アプリケーションの普及。3つ目は、アプリケーションレベルでの標準化の問題です。つまりICカードを実際にどのように活用していくのかといったことです。この点については、通産省も運輸省、郵政省、厚生省といった他の省庁と立場は同じだと言えます。例えば、電子商取引にICカードを利用する場合、どのように機能を搭載していくのか、セキュリティをどうするのか、個人認証をどうするのかといった問題などがあります。

中村：各省庁での具体的な取り組みについてはどのようになっていますか。

藤原：例えば、医療の分野について言えば、カルテなどの個人情報をICカードの中に入れていくといった動きがあります。そうすれば患者が病院を変えた場合も、前の病院での情報を活用することができるわけです。この分野については、ニュー

メディア開発協会やメディス（医療情報システム開発センタ）が厚生省の指導の下、活動を実施しています。さらに今後は、国際的な視野に立って医療のICカードをどのように広げていくかといった点についても取り組んでいきます。また運輸省関連では、汎用電子乗車券技術研究組合が例えば鉄道の定期券をどうICカード化していくのかといった問題に取り組んでいます。郵政省は、電波を使った非接触のICカードの標準化、利用方法などの問題に取り組んでいると聞いています。

中村：そういった各省庁の取り組みに対しJICSAPではどのような役割を担っているのですか。

藤原：JICSAPは、特定の省庁の枠にとらわれない任意の団体として、アプリケーションにとらわれることなく、広く活動している組織です。具体的には、ユーザーのニーズに合ったICカードをいかにして作っていくかというのを目指して、アプリケーションのベースとなる標準化作りをJICSAPが主体となって行っているわけです。そういった活動がその後、JICSAP仕様となっているわけです。

## 標準仕様ではICカードの高コストを解消する

藤原：これまで商店街、医療、保険、建設関係など色々な分野でICカード化が進められてきました。しかし、残念ながら、これらのカードがこれまで、広く普及してこなかった理由の1つに、コストが高かったという問題があります。例えば、建設関連であれば、建設機械化協会が中心となって、多額の資金を投じて実証実験を行いました。それでも、1枚1000円以上のカードとインフラコストが必要でした。次に利用の広がりが限定されていた点です。商店街でもさまざまな所で導入や実証実験が行われてきました。しかしその地域ではカードを利用できませんが、例えば隣の町で同じ

通産省機械情報産業局  
電子機器課  
電子デバイス第一係長  
藤原達也氏

1954年2月生まれ。東京理科大学を1979年卒業後、旧国鉄に入社。国鉄民営化の87年3月に通産省に入省。電子機器課 情報処理振興課 工学院産業技術研究室、情報処理システム開発課を経て現職。半導体デバイス、電子部品などを担当する。カードに関しては、情報処理システム開発課当時から取り組んでいる。



ようなICカードシステムを構築しても、ICカードの仕様やシステムが異なっており、相互に利用できないというような問題がありました。つまり、これまでICカードが普及しなかった要因として、大きくコストの問題と、利用に広がりがないといった問題があったと思うのです。この2つの問題を解決するためにも標準化があるわけです。

中村：その背景をもう少し詳しくお願いします。

藤原：標準化というのは、ハード的な標準化ではなく、使い方を標準化していくということです。使い方を標準化することによって、1枚のカードを多目的に利用できることとなります。つまり1枚のカードにいろいろなアプリケーションを乗せることができるカードが可能となる。すると利用する機会が増えていく。また多目的な利用を実現することにより、1枚あたりの相対的なコストを下げることもできるわけです。この使い方の標準化を実現するにあたり、2つの層があります。まずはJICSAPで標準化の仕様を作成し、ニューメディア開発協会でその上のアプリケーションの部分を作り込んでいくという役割分担をしているのです。

中村：ニューメディア開発協会に関連しては、北海道の滝川市で実験が行われましたね。

藤原：そうです。そして滝川で実証実験を実施して出た問題が、広域性がないといったことでした。そういった問題意識をJICSAPに持ち込み、標準化のアプリケーションを作ったわけです。そしてその仕様は、今回、岐阜県での実証実験に活用されることになりました。色々なアプリケーションが色々な所で使える、これで本当の意味でのインフラ作りが完成するのではないのでしょうか。しかし標準化というのは、あくまでもインターフェースの部分です。ですからカードの作り方は各メーカーそれぞれでいいわけです。インターフェースが共通となることによるメリットは、ユーザー側にとっては、色々なカードの中から選択できるといった選択肢ができることがあります。選択肢ができることにより、競争原理が働く。つまり競争原理が働くことによってコストの低下が期待できます。複数の選択肢を可能にしてのは、滝川市が一番初めではないでしょうか。

中村：JICSAPの今後の取り組みについてはいかがですか。

藤原：例えば、現在ECOMでの取り組みとJICSAP開発のアプリケーションを1つのカードにできないかといった点について検討を進めます。



海外との連携の視野に

またメディスで使うカードとJICSAPのカードを使えないかといった点も検討していきます。他にも、今度、社会保険庁がICカードの導入を検討していますが、協力関係を結んでいくことも考えています。

中村：これまでのお話から、JICSAPの役割を整理して、まとめて頂くとどういったことになりますか。

藤原：まず、一番重要となることとしては、省庁間などといったアプリケーションにとらわれず本当の意味での全体のインフラ作りといった問題に取り組んでいるということがあります。そういったインフラ作りを通じて、ICカードの活用範囲を広げていってもらいたいと考えています。さらに今後は、国内だけではなく、海外との連携も視野に入れて頂きたいと思っています。JICSAPの認知度もやっと高くなってきました。各省庁からもJICSAPへ参加することも増えてきています。よく省庁間の壁といったことが問題になりますが、ここではそういった問題もなく、進んでいると思います。

## 制度的な議論にも アドバイスを期待

中村：ICカードの普及には、今までおっしゃられたハード面での問題と制度的な面での問題もあると思われるのですが、こういった制度面での問題について、JICSAPではどのようなかわりを持っていますか。

藤原：制度面については、そういった分野の専門家がありますので、JICSAPが直接何かをするといったことはありませんでしたし、今後も今のところは検討されていないようです。ただ、これまで制度面での専門家が行ってきた議論の中には、ICカードの特性を抜きにした議論になっていた面がありました。誰もが、ICカードを単独で利用して



メーカーの受注生産の意識の変革が必要

いこうとは考えていません。しかし、カードの特性を無視した議論では、結果として出来上がってみたら単独利用しかできないということもありました。ですから、JICSAPの方から制度的な議論に対しても何らかのアドバイスをしていくことによって、そういった問題も回避できるのではないのでしょうか。それから現在課題となっていることとして、アプリケーションが色々出てきたので、A(アプリケーション)IDをどうするのかといった問題もあります。AIDを決めておかないと、汎用的に利用しようとしても不可能になります。その結果、新しいアプリケーションが出てきても利用できずに古いまま利用し続けなければならないこともあります。それで一番困るのはユーザーということになるでしょう。こういったことにユーザーが不安を感じることになれば、その不安感がICカードの普及を阻害する要因にもなりかねません。AID作りには、そういったユーザーの不安を解消することに役立ちます。

### メーカーの受注生産の意識変革にもJICSAPの標準仕様は貢献

中村：JICSAPの役割としては、まずアプリケーションにとらわれない標準化ということがある。そして標準化が進むことによって、ICカードの普及を阻害していた要因である、高コスト、さらに狭い利用範囲といった問題が解決へ向かうということだと思います。今まではその標準化や汎用的な利用を阻害していた要因の1つとして制度面も関連があったということです。そして、標準化のために今後は、JICSAPからの制度的な議論に対しても何らかのアドバイスを実施することで、今までの問題点を解決していくということですね。しかし、標準化を妨げる要因は他にもあったのではないのでしょうか。

藤原：これまでICカードを導入する場合、メーカ

ーはユーザーの要望に答える形で仕様を作ってきました。つまり、ユーザーによって仕様が変わっていたわけです。メーカーの仕様が一本化されていないわけです。メーカーとしては、受注生産という意識でいました。もちろん問題はメーカー側だけにあるわけではありません。ユーザー側としても自分たちの利用方法を差別化しようという意識があります。差別化といってもアプリケーションの部分であれば問題ないのですが、もっと深いところの仕様まで影響する差別化を望むわけです。しかもその差別化したシステムは、小さいシステムでしか利用できません。差別化ということは、一種の囲い込みです。しかしこういった小さいシステムでの囲い込みでは、囲い込みと思って進めていても、実は囲い込まれていた、とうことにもなりかねません。ですからまずメーカー側から、ICカード全体を広げるにはどうしたらいいのかを考え、さらに完全な受注生産の意識から抜け出す必要があるのではないのでしょうか。JICSAPの標準仕様作りには、こういった問題に対しても役立つのではないのでしょうか。

### 横断的な情報交換の場の役割も

中村：仕様の標準化といった点で、他にも重要な、ディスクロージャーといったことがあります。海外のメーカーに比べて日本のメーカーでは、この点でも遅れをとっているようです。

藤原：ICカードの新しいシステムの提案は、海外で多くされはじめてきています。またクレジットカードシステムなどでも、海外メーカーの動向は重要です。今後、国内だけでなく、海外も視野に入れて活動することでも重要でしょう。

中村：カードの場合、インフラの整備が必要不可欠です。そういった意味での標準化が重要な要素であるかと思います。

藤原：そうですね。今のところ、ICカードの普及はそれほど進んでませんが、今後、ICカードの普及が進んで行くに従って、ユーザーの不満の声が大きくなることも考えられます。つまり、ユーザーにとってICカード化によるメリットは、どこでも使えるということでしょう。ですから、標準化するということが、最終的には消費者にICカードを利用するメリットを還元していくことが最も重要でしょう。それがICカードを普及していく鍵になるかと思います。

【月刊カードウェーブ1998年3月号<発行(株)シーメディア>より抜粋】